

編集後記

私が北海道教育大学札幌校に赴任したのは、東日本大震災の年、二〇一一年四月であった。もう、あしかけ三年になるうとしている。

北海道の季節の流れは速く感じられる。長い冬のあと、短い春と短い夏が訪れる。その夏のうちに、牧場では牧草を刈り取り、ロールにして冬に備える。夏のうちに冬支度が始まる。能天気なキリギリスには生きにくい大地ではある。

大学がある、あいの里地区は屈指の豪雪地帯である。昨年度の降雪量は六・六三メートル。積雪は二メートルほどである。石狩湾から吹きつける風は強く、一週間に三、四日は吹雪く感じた。まれに視界ゼロの「ホワイト・アウト」となり、まったく見通しがきかなくなる。毎日が「八甲田山」サバイバルの感がある。雪と風が厳しくなる時期と、この雑誌の冬号の編集作業が重なる。土日のほとんど人影のない校舎で、風が烈しく窓を叩く音を聞きながらの孤独な作業、たった

りする。帰りには、マイカーがすつぽりと雪に埋もれており、掘り出さなければならぬ。スコップと雪落としのブラシ、牽引用のワイヤーは必携品である。

雪に閉ざされた環境のなかで、私はいつの間にか、精神のバランスを欠いていた。風土・気候と精神・意識は密接に関係するらしい。鬱々とした精神状態など、自分にはほど遠いことだ、と考えていた。だが、『魔の山』に入ろうと思つて入るものなど、誰もいないのだ。迂闊であつた。何をするにも気力が湧いてこない。さしのべられた救いの手、と思つて、すがつてみると、気まぐれな枯れ尾花だったりした。

神田大尉が、「他人を頼ろうと思うからそんな夢を見るのだ。こんなところで他人が頼りになるか。自分の身体を自分で始末できないでどうする」といつている（新田次郎『八甲田山死の彷徨』。至言である。

やがて、「何のために生きているのか」という、「存在」への問いが去来するようになり、安定剤でなんとかしのぐよう

な日々が一年近くつづいた。

今年、ストーブの世話にならなくなつたところからだろうか、気候の変化とともに、精神がわずかに回復する兆しを見せた。これを奇貨として、逆に、「存在」の問いに沈潜してみた。逃げようとするから、いつまでも治らないのだ。

昔読んだ古典を読み直してみた。運命を背負う人間のドラマ、シェイクスピアの四大悲劇『リア王』『マクベス』『オセロ』『ハムレット』（木下順二訳）。優れた戯曲は、優れた論文と似ているように思えた。伏線の張り方や、研ぎ澄まされた台詞、事件の説き起こし方から、一気に展開させて、たたみかけていくスピード感……。大伽藍の如き堅牢な言葉の建物のなかを歩きながら、身体に一本しゃんと筋が通っていくような気がした。

この夏、利尻島・礼文島に渡った。来年四月から名古屋は中京大学に移籍することが決まつたので、北海道にいううち

留萌から稚内まで、オロロン街道・国道二二三号をひたすら北上する。途中、初山別を通った。

私は北海道に赴任するとき、高村薫の『福澤彰之シリーズ』三部作『晴子情歌』『新リア王』『太陽を曳く馬』を携えていた。震災の影響で、赴任するときのフエリーは新潟発の航路しかなかった。小樽までの長旅の間、まず、『晴子情歌』に挑戦した。だが重厚な壁となつて立ちはだかり、挫折したままになつていた。

初山別は、『晴子情歌』の舞台の一つで、鯉漁で賑わつた漁村である。私は車を止めて、海を見んでいた。すると、低く垂れ込めた雲の一郭が切れて、太陽光が差し込んできた。陽矢である。日の光にキラめいた海面は、鯉の群来のようにみえた。ふと、いまなら『晴子情歌』を読めるかもしれない、と思った。札幌に帰宅後、私はすると、その文学世界に入つていった。

『晴子情歌』は本郷・津軽半島・北海道を舞台に、母・福澤晴子と息子・彰之

の魂の交流を描いた文学である。第二次大戦を挟み、戦前・戦後を往復し、鯉漁・遠洋漁業の現場と家族の肖像を描く。問われているのは、人間の「存在」である。無か有か……。

この物語は古典文学を援用すること、二重三重に膨らみを持たせている。たとえば、青森の筒木坂は、エミリー・ブロンデの『風が丘』のイメージが重ねられている。遠洋漁業の船上では、大岡昇平の『レイテ戦記』である。埴谷雄高の『死霊』を引きながら「存在」論が展開されるところは、戦後文学の伝統が生きている。戦中派と全共闘世代の会話も六〇年代論として見事という他はない。マルクス主義と構造主義、ポスト構造主義に関する考察も深く、戦後日本思想史を読んでいるかのようなのである。

『新リア王』は、永平寺で修行し、僧になつた彰之と、青森選出の代議士、父・栄が、つばぜり合いの問答を行う。

宗教と政治が火花を散らす。六ヶ所村や新幹線誘致の利権の構造が白日の下に照

らされ、これは戦後日本政治史である。『太陽を曳く馬』は9・11以降の世界を描く。彰之の養子で画家の秋道が殺人事件を犯す。そこに登場するのが、『マークスの山』『照柿』『レディ・ジョーカー』の合田雄一郎刑事。高村文学の二つの流れが激しく交差する。

風景をたちまちのうちに現前させ、登場人物の意識のヒダまで描出する筆力は、まさしく文学の名に値する。現代日本文学でこれだけの規模と深みを備えているものは少ない。私は、言葉の力、文学の世界に浸ることで、完全に精神が恢復した。高村文学は北海道三年間の最大の収穫であり、唯一の救いである。

もし、精神が不安定にならず、そして、初山別を走ることがなければ、私はこの文学世界を知ることなく、一生を過ごしたかもしれない。してみると、人生なんて、なにが幸いするのかわからない、という平凡な結論に落ち着くわけだ。しかし、この平凡な結論に至つた経験は貴重であつたといわねばならぬ。(小川記)